

栗原信秀の石碑に付いて

その二

外山 登

除幕式当日に配布された決算報告書のトップ

ページは、その一に掲載しましたが、大きな巻

紙風の用紙の裏面に上下二段に「寄附者芳名並

金額」として寄付の金額と名前が記録されてい

ます。（決算報告書名簿全）

この「寄附者芳名並金額」によれば、寄附者の

数は次のようです。

参拾円 二名

二拾円 五名

拾五円 四名

拾円 十三名

五円 三十九件(四十一名)

四円 一名

参円 十二名

貳円五十銭 一名

貳円 二十名

一円 四十六名

五十銭 二十名

十銭 十三名

合計 百七十八名

当時の三条は周りの村を順次吸収合併し昭和

九年一月に市に昇格しており、十年の市の人口

は三万四千六百五十九名でした。（三條市史資

料より）

信秀について感心の強かったのは、恐らく旧町

民の方だったと思いますが、その中で寄附をさ

れたのが百七十八名だったということです。果

たして、その方々がどのような方だったのとし

ょうか。これが解ると、当時の市民の信秀に対

する関心の程度が解るのではないかと考えま

した。

最初に、寄附者名簿の中から五円以上の寄附者

六十三名を対象に、解った方について解説させ

て頂きます。

先ず、名簿の拾円以上を寄付した部分を掲載し

ました。（老拾円以上の名簿）

老拾円以上の寄附者について

金参拾円也

福島要吉(親戚)

既に説明しているように、初代要吉の妻が信秀

の従姉妹に当りました。当時の要吉さんは三代

目で養子でしたが、血縁関係のある家系から来

られた方でしたので、石碑建立には特に情熱を

もって協力されたようです。

岩田屯（石碑建立関係者）

石碑の銘文の原本を書かれた方で、この

岩田愛山の書いた原本が今井新造の遺族に伝わっていました。「その一」に詳しく説明しています。

これらの寄附者について資料がないか探した処、所蔵している本の中に「三条その人物」という本が見付かりました。「三条その人物」

の奥付）

三条その人物（非売品）

昭和五十三年十月二十五日発行

編集 西方 藤七

印刷 三条市興野一〇四
電話（〇二五六）二二二四六

株主 株式会社 希望社
三条市北新保一五五
電話（〇二五六）二二二四一

発行 三条人物研究会
三条市北八五三（南教育会館内）
電話（〇二五六）二二二四七

発行取扱 審美社
東京都文京区本郷一八二
電話（〇三）八一五一四五三

ここに三条の歴史上以来の人物が紹介されており、目次に次ぎの項目があります。

- 一、長久山本成寺創建期までの人物
 - 二、三条戦国期の人物
 - 三、三条封建期の人物
 - 四、三条商売自由期の人物
 - 五、三条市制執行期の人物
- 石碑建立が昭和十年のため一、二、三は関係なく、ここでは四、商売自由期の人物と五、市制執行期の人物に記録されている方について寄附をした方々を説明します。

名簿に解り易いように、刀剣會の方に○印、金物卸業組合の方に○印、市制関連の方に□印を付けました。

寄附者芳名並金額

金参拾圓也	三條市二ノ町 福島 要吉殿
全	東裏館 岩田 屯殿
金貳拾圓也	〃 〃 〃 山英資殿
全	〃 〃 〃 出石太郎殿
全	〃 〃 〃 栗原初太郎殿
全	〃 〃 〃 井長三郎殿
全	〃 〃 〃 山平吉殿
全	〃 〃 〃 西川萬吉殿
全	〃 〃 〃 三條市東三條驛通 岡田 徳三郎殿
全	〃 〃 〃 仲ノ町 岡田 徳三郎殿
全	〃 〃 〃 八幡小路 福瀧 酒造殿
全	〃 〃 〃 寺町 福瀧 酒造殿
全	〃 〃 〃 三條市四日町 飛田 新造殿
金拾圓也	〃 〃 〃 島田 甚造殿
全	〃 〃 〃 八幡小路 樺澤 盛法殿
全	〃 〃 〃 一ノ町 今井 雄七殿
全	〃 〃 〃 下町 土田 雄三郎殿
全	〃 〃 〃 島田 石田 完二殿
全	〃 〃 〃 三ノ町 長谷川 藤三郎殿
全	〃 〃 〃 島田 藤 眞次郎殿
全	〃 〃 〃 田島 中 廣吉殿
全	〃 〃 〃 寺町 藤 幸八殿
全	〃 〃 〃 三ノ町 大竹 藤太郎殿
全	〃 〃 〃 三條驛前 高橋 儀平殿
金貳拾圓也	〃 〃 〃 金子 祿三郎殿

金貳拾圓也
□栗山 英資（市制執行者）

昭和六年に三條町長となる。(略)昭和九年一月一日市制が執行されて初代三條市議会議長となる。そして三條市制草創期の懸案解決に尽し、昭和十三年には二代目三條市長に推されている。(「三条その人物」より)

◎□小出 石太郎(刀劍會)(市制執行者)

東京大学医学部をでて北三条通りの二之町に開業する。後に三条医師会長をやり昭和十三年から十八年にかけて二期市議会議長をつとめる。

(「三条その人物」より)

当時の三條刀劍会会長。

栗原初太郎(親戚)

「その一」で掲載した「名工と其の作品」の項に「付掲の諸付は令孫蔵原初太郎氏の所蔵に係り何れも名工信秀師の名誉を後世に伝えるもの」と記述のある信秀の孫に当る方です。

今井 長三郎 (親戚)

既に度々書いているように信秀の末弟今井新造の長男です。

◎西山 平吉(刀劍會)

明治三十三年七月、燕の上町に生まれた中越自動車株式会社(現越後交通) 社長。

平吉は初め警察官となり、昭和三年に中越自動車(株)を堤清吾らが設立して入社する。後に市會議員をし、中越自動車(株)の社長となり、本社を東三条駅前から長岡へ移す。

中越バスは中越全域の交通便に貢献し、越後交通に発展する。(新潟県年鑑) (「三条その人物」より) 三條刀劍会會員

三條商工新報昭和十年六月一日号の七頁目に石碑建立の意義を書いた、特に長文の記事がありますので後で引用します。

金拾五円也

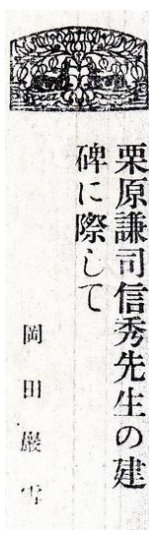
□源川万吉(市制執行者)

明治三十四年、一之町に生まれた三條商工會議所二代目会頭。万吉は初め市蔵といい、明治大学をでて、後に襲名する。源川家は小松屋といい呉服反物を商い大店をはり、代々万吉を名のる。一八六十年代(文久年間)の万吉は村上藩の御用達商、町年寄として行政に尽し、明治十一年九月二十二日、北越巡幸の折に町代表として笠原文平と共に拝謁を賜わる。また先代万吉は三條小学校などの公共施設の建設に多くの寄金をする。大正初めに呉服商を廃業、市蔵は襲名して若い頃から町の主だちとして活躍

する。三条金物(株) 三条農具、三条物産(株) 三条倉庫などの取締役をやり、昭和二十一年に商工會議所二代目会頭として業界に尽す。(県年鑑、市史資料) (「三条その人物」より)

信秀の帰省後、天鈿女命の彫りの入った鉄鏡を発注した源川直茂の子孫です。

◎岡田徳三郎、刀劍會會員で、三條商工新報昭和十年六月一日号の一頁目に次ぎの表題で石碑建立の意義を書いた記事がありますが、この



栗原謙司信秀先生の建
碑に際して

岡田 巖 雪

岡田巖雪がその人と思います。

◎福謹酒店、大瀧酒店共もこれだけの寄附をしているので、刀劍會の會員と判断しました。福謹酒店さんは、今でも八幡小路にあり、私の住まいの近くのので、石碑前の写真に当時の方が写っていないかと、写真を持参して見て頂きましたが、残念ながら居られないとのことでした。

大瀧酒店は何処にあったかは覚えていません

が、今は無くなっています。

金壹拾円也

□飛田新作(市制執行者)

明治二十二年、南蒲原郡大面の飛田藤五郎の長男として生まれた三条市初代市長。

新作は麻布獣医畜産学校をでて四日町に獣医業を営む。

後に三条町議員をやり、昭和二年に県議員をする。

昭和六年から市制執行するまでの町会議長をつとめ栗山英資町長とコンビを組み地元政界に重きをなす。

昭和九年一月一日に三条町は市制を実現して全国百二十三番目の市となる。人口三万二千八百九十七人、五千九百八十世帯で誕生する。

県内では新潟・長岡・高田に次ぐ四番目の市制執行で、栗山英資町長が初代市会議長となり、飛田新作は初代市長となる。

飛田市長は昭和十三年までの草創期の市政に尽した自治功労者である。(市町村合併誌)

(「三条その人物」より)

□金子甚造(市制執行者)

明治二十八年三月 三条四之町に生まれた

県会議員、甚造は分家して島田に往み、大正十五年の三十一才のときから町会議員、市会議員をする。この間、昭和十三年から二期、三年間にわたり市会議長をつとめる。また昭和十年九月から十七年の十二月まで県議員となり県政に貢献する。当時は市議員と県議員の兼職ができたのである。

昭和十七年十二月九日現職中、四十七才の若さでなくなり、惜しまれた地元政治家である。

(市議会事務局資料) (「三条その人物」より)
余話、私の町内に生家の金子邸があり、子供の時、町内では只一軒だけ、「金子さん」と、さん付けで呼ばれていました。

◎樺澤盛法(刀剣會)

泉薬寺住職。石碑前の写真に中島欣也さんが書かれた名前の中にあります。泉薬寺は市内にあります。

□今井雄七(市制執行者)

三条商工会議所初代会頭今井雄七は北海道札幌の今井デパート創業者である今井藤七の子として生まれ、父の生地である三条の一之町宅に県内物産の仕入店をおく。

恩義に厚かった父藤七の資質を受けつぎ、三

条を郷土として愛し公共に尽す。

昭和十年に現中央公民館である武徳殿の建設基金として三万円を市に寄付する。また昭和十五年に今までの三条商工業界をまとめ三十年の歴史をもつ金物同業組合を発展的に解散させ、三条商工会議所を設立する。

雄七は推されて初代会頭をつとめ十九年没す。(商工会議所三十年史) (「三条その人物」より)

二代目藤七は北海道のマルイ今井デパートを経営しつつ、三条商工会議所の会頭を兼務していたことになります。また、北海道では薄利で売る姿勢が評価され、デパートなのに「まるいさん」とさん付けで呼ばれていたそうです。

○藤川貞次郎(商業者)(金物組合員)

次ぎの藤川貞資の子孫に当る方です。

藤川貞資

北海道取引きを初めにした三之町の金物商。明治七年、新潟に川蒸気船会社が設立して長岡まで運航する。三条新潟間に「さきがけ丸」が就航し、明治七年に北海道商人が来条して金物取引する。北海道に渡って金物行商した先達は

明治十年の石田利平である。(三条市史資料)

(「三条その人物」より)

□長谷川藤三郎(市制執行者)

明治三十三年十月に生まれた実業家。藤三郎は若い頃から鍛冶に励み、マルト長谷川工作所を創業する。後に共立鍛造(株)の社長などを作り、三条市会議員をする。(新潟県年鑑)(「三条その人物」より)

マルト長谷川工作所は、三条で最初にペンチを作ったメーカーで競馬印、マルトのブランドで現在も地元で知られている工具メーカーです。

余話、現在の社長は四代目ですが、三代目だった現会長が私の実弟です。

◎中島廣吉(刀剣會)

中島欣也さんのお父様。

◎藤島幸八(刀剣會)

石碑前の写真に中島欣也さんが書かれた名前の中にあります。

三條商工新報昭和十年六月一日号の二頁目に次ぎの表題で石碑建立の意義を書いた記事があります。

○高橋儀平(商業者)(金物組合員)



明治三年、初代儀平の長男として裏館に生まれた三条金物の先達者。

幼名は儀三郎といい十五・六才頃まで父儀平について鋸製造をやる。後に二之町に移り十七才頃より独力で金物行商を始める。

初めは三条近郷から次第に東京・大阪・東北に販路を拡げる。明治四十年には三条金物商で初めて朝鮮取引をするため単身で釜山に渡る。そして京城まで行き、後に中国の東北にある奉天まで販路をひろげる。

儀平は裏館に高儀工業所を設立して鋸製造やり、主として長男の中儀にまかせる。それで鋸の鑑定に炯眼をもち、会津若松に開催された全国勸業博覧会の鋸審査員をやる。

儀平は町議を一期、昭和九年から市議を一期つとめ金物組合の三代目組合長をやる。また北越商業銀行が行きづまり再建のため常務取締

役をつとめ業界発展に尽す。

孫の儀一郎が二十五才になると金物営業をまかせて悠々自適の生活をする。仏教に帰依し狂歌作りに趣味をもつ。また鴨緑江節が得意で即興作を酒席で唄う。

昭和二十三年七月、行年七十九才で没す。

(「三条その人物」より)

儀平の孫儀一郎の長男一夫氏が社長退任後、三条市長を一期半勤められました。

余話一、一夫氏と私が隣の町内であること、小中高校と同級にはなりませんでしたが同学年で、事業に入ってから同業ということもあり、親友付き合いをさせて頂いています。余話二、高橋家には茶室があり、その欄間に古い鉄鑊が沢山嵌められていました。金物問屋は鍛冶屋さんに造らせた道具刃物類に自社マークを打ちますが、高儀さんは古くから「兼定」を商標登録しておられたので、当時のご主人が刀に通じておられたと考えることができました。

□金子禄三郎(商業者)

明治八年、三条本成寺の新保に生まれた嵐南開発者。幼名を金一といい、父が早死し禄三郎

は直接出費はしていませんが、多くの市制関係者が寄附をしていたことが解ります。

金五円以上の寄附者

続いて金五円寄附の三十九名の名簿を掲載します。

今井テヲ(親戚)

今井新造の家系の方と考えましたので、碌郎さんにお尋ねしたところ、詳しいことは解りませんが、ご親戚の方で没年昭和十二年二月二十日とのことでした。

福島さんから頂いた、池氏の家系図によると長三郎には妹が三人いましたので、その中のお一人と想像しています。

□桑原 謙一(市制執行者)

明治三十年、疍医桑原春随の孫として井栗に生まれた市議会議長。

桑原家は昭和八年、井栗の小作争議のときに興野へ移住して代々の小児医院を営む。

謙一は戦後市議員となり昭和二十二年、二十八年の二期、市議会議長をする。

また一之木戸小学校の初代PTA会長、中央公民館長をつとめる。社会教育の貞子女医は妹。

昭和五十年、七十八才でなくなる。

(新潟県年鑑) (「三条その人物」より)

○成田茂八(金物問屋)

現在は廃業されましたが、旧五之町の同じ場所にご遺族の娘さんがお住まいです。

□○外山栄助(市制執行者)

明治十六年、三之町に生まれた三条商工会議所初代副会頭。

外山栄助は四之町に金物商を営み、昭和十年代におかれて三条金物同業組会長となる。

金物同業組合は戦時統制が厳しくなった昭和十六年三月、創立三十一周年で解散する。栄助は最後の組会長。昭和二十七年、六十九才で没す。(三条市史資料)

余話一、私の祖父で、明治四十四年に金物卸業を創業し、現在、私は会長職ですが事業は継承しています。

余話二、祖父は骨董好きで、特に地元の文人の掛け軸等を沢山収集しましたが、刀の力の字も聞いたことがないので、金物同業組合の一人として協力したものと考えます。

○望月順資(金物問屋)

隣町にありましたのでよく覚えていますが、

現在は廃業されています。

◎大竹晋作(刀剣會)

既に発表した「三条における信秀」「その一」に掲載済みの愛刀家で、石碑前の写真に名前を記入してあります。

○鈴木新平(金物問屋)

隣町にありましたのでよく覚えていますが、現在は廃業されています。

○外山徳太郎(金物問屋)

外山栄助の兄で金物業を二人で創業し、後に栄助が分家しました。

余話、その一に書いた、米田真佐司さんの又従兄弟が二人お勤めで年明けしたカクト商店の主人です。現在は廃業しています。

○馬場徳松(金物問屋)

その後市議員になられますが、現在は廃業されています。

○佐野榮松(金物問屋)

現在ご子孫が事業を継承しておられます。

◎阿部松一(刀剣會)

明治三十二年、三条に生まれた刀剣彫金家。昭忠は本名を松一といい、鋸業を営む。阿部家は三条鋸の祖といわれる阿部四兵衛の何代目

かの四兵衛の分家である。有名な深沢伊之助二代目は五代目阿部四兵衛に弟子入りして鋸業をおこしたといわれている。

阿部昭忠は後に栗原彦三郎昭秀に師事し、刀剣彫金家に転業して技をみがく。また刀剣研ぎ、鐔造りに励み、昭和二十年に大日本刀匠協会彫刻審査員となる。この間、刀身彫物、鐔作品で数多く受賞する。(信秀と盛寿について) (「三条その人物」より)

◎鳥羽萬亀造(刀剣會)(文筆家)

既に、「その一」に紹介しているように、信秀について遺族から取材した方です。

商工新報の十年一月十五日号に、前年十二月三十日から正月に掛けて東京の遺族を尋ねて取材された記事が掲載されていますので、後で詳しく掲載します。

○三条金物会社(金物問屋)

三条金物の創世記から続く名門岩崎又造商店と、やはり名門の加藤文次郎商店が昭和二年に合併して出来た会社で、現在加藤家のご子孫が事業を継承しておられます。

余話、現在の店舗は当社と同じ金物団地内にあります。

金子甚六

先に紹介した金子甚造(市制執行者)の生家の子孫の方で、現在も四ノ町の同じ処に立派な邸宅があります。

○内山勇吉(金物問屋)

一八六五年(慶応元年)三条塚之目、高橋金兵衛の三男に生まれた三条金物の先達。

幼名を仁平治といい、二十才のときに金物問屋内山家に婿養子となり家業を発展さす。

大正元年に桑切庖丁の製造を企画して工場を設立、三条で初めて蒸気ハンマーを設備する。この間、明治三十三年に三条信用銀行の設立に尽す。また町議、学務委員、郡会議員二期つとめ金物業界の進展に尽力する。

内山勇吉は大正期の三条金物商を代表する人であり、大正十四年の六十一才でなくなる。

(立田一郎氏稿) (「三条その人物」より)

子孫の内山裕一が継承された後、昭和五十八年に市長になられ二期勤められ、その後亡くなられましたが、内山勇吉商店の看板は今も残っています。

高野亀太郎

戸車を製造する鑄物工場を経営しておられ

ましたが、昭和四十年に三条市長になられ、一期半勤められました。

他に山本七資、小林ラジオ店、羽生文具店はよく存じ上げており、今でも同じ場所にお店がお住まいがあります。それ以外の方については残念ながら調べても解りませんでした。

まだ、他にも金四円以下の寄附者の方が百十三名おられますが、信秀の石碑建立に対し賛同して、寄附をされた方々です。

金四円未満を寄附された方を含めて、私が存じ上げていたり、ご縁のある方が沢山おられたのも、私が地元の人だからだと改めて思い知らされています。

金四円以下の寄附者についての説明を割愛さ

社 告

信秀師建碑事業を賛し是が援助に吝ならざりし本社は事業完成を祝するの意から特に除幕式記念號として増頁を爲し且つ數百部の増刷を行ひ關係方面へ寄贈せり

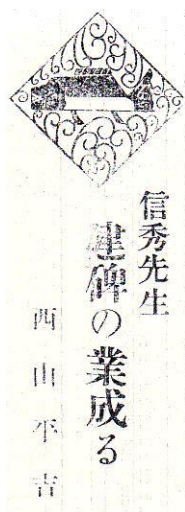
三條商工新報社

せて頂きました。

当時の「三条商工新報」について

既に沢山引用している商工新報は石碑建立に当たり特集記事を掲載して協力していました。刀剣會会員も四名の方が石碑建立の意義について書いていますが、七面に掲載されている一番長文の西山平吉の記事を次に引用します。

信秀先生 建碑の業成る



信秀先生

建碑の業成る

西山平吉

故刀匠栗原筑前守信謙司

師の石碑建設されましたに付一言所感を述べさして戴き併せて吾人の座右の銘師と致したいのであります。

故栗原筑前守は三條市の出身にして偉人である事は最早皆様の知って居られる事と思ひますが中には知らない方もある様ですから簡単に師の偉人觀を一つ書きにして見たいのであります。

一、新刀で平信秀と銘してをる巨人の刀匠であります。

信秀師は東京四谷区山浦清 磨先生の弟子として習へ刀名四ツ谷正宗と称し切味のよい事に新古刀中にも有名なのであります。

現在生きて居られる高野剣道範士様が信秀の刀はよく切れる名刀だと云つて裏書してをられます。

新潟縣の人はよく知つてをりませんが東京方面では大人氣を有してをります。

最も代表的の刀は明治大帝の御守刀、弥彦彦

神社の寶刀、三條八幡神社の神刀等であります。

二、彫刻を以て有名であります

信秀師の彫刻は主として紳佛像の彫刻が有名で全く生きて居る様な刻み出来であります

靖國神社の御神鏡、弥彦神社の御神鏡其他名作品が随分あります

三、信秀師は勤王の志士でありかくれたる勤王の志士刀匠清磨先生の數へを受けで清磨先生の切腹せられた後と雖も其の教へを守り明治維新の断行には陰の志士として大いに盡力せられた信秀師であります

甚だ簡単な説明ではありますが三條市民として此の教へを受ける事が相當大である事と思ひます。

殊に關係の深いものは刃物工業家でありますが當市民の龜鑑と為すに適してをります。

私は常々申して居りますが刀劍の鍛鍊法を三條工業家に普及致したいです。決して刀劍を鍛へて職業と為せと云ふものではありません

刃物を造るに刀劍の價値を知り刀劍の鍛鍊を知つてをれば之等の特徴を刃物製作に利用をしましてよりよい物を安價に造る事が出来ると思ひます。

刀型には種々ありまして何々刀には重心が何處にあるかを見え出すのであります重い刀でも切る場合に軽く動かせる事は刀の形容に起因するのであります。

刀身の長さに對する巾、目方、そり具合、柄其の他種々の關係等があつて相當學ぶべき点が多くあります。

刃物類に於て軽く、良く切れる。又切り易く菜魚を切るにも勞れぬ刃物を造らねばならんと思ひます。

之等を造るには、必ずや刀の価値即ち力と云ふものを利用せねばならんでせう。

岐阜県の関町産刃物類には刀の力をよりよく有利に使つてをるではありませんか廿六代統

く兼元即ち関の孫六銘刀の筋を引き、落せる小豆も二つに割れる、さすれば切れる等と刃物の宣傳を盛んにやつてをると同時に刀の力を充分に利川し研究してをるてはありませんか、吾々は只単に刀を好むのみではありません。勿論刀は日本精神の現れであります。気分が悪いとき善いとき何れの場合でも水のしたゝる刀の光を眺めるときは何と言へ現して見やうのない気分が致します。

刀を御研究なされてをる方は勿論、御研究になつて居らぬ方に之から刃物工業家は絶対に御研究なされて是非刀の力を御利用になつて優れる刃物を造つてほしいのであります。

依面（よつて）吾々刀剣会は刀の研究のみでなく教化団体として精神修養に勤めるはもとよりであります。が尚ほ会として関町には名刀の孫六のある様に三條でも四ツ谷正宗信秀あるの役を以て三條刃物はさわれば切れるの宣傳をしたのであります。

又一面三條盆踊りの歌中に面白くない文句を往々聞くので悪い文句を俳するために三條款踊歌二十を作ったので外らは宣伝、内には研究内外揃つて三條刃物の産業の發達を計りたい

のです。

之が為に吾々刀剣会の常々思ひ居つたのが今日現れたのでありまして幸ひに皆様の熱のある御後援によつて故栗原信秀師の碑を建設し得るに至つたのであります。

そして信秀師の靈を永遠に祀ると共に其の教を受け郷土の榮譽を傳へんとするものであります。が此の声挙ぐるや数月も経ぬのに六月七日除幕式を挙行する事が出来るので故山に知己の少い信秀師の名久しく野土に埋れてをつたのですが皆様の熱のある御後援により出来ますので地下に居られる信秀師もさぞ御喜びの事と思ひます。吾々の微意のある處を知られて三條物産の發達する様御導き下さるものと思ひます。

之から三條の盆歌三つばかり歌ひませう

一、刀きたへた信秀謙司

明治みかどのイヤサ御番鍛冶

一、名刀かざせばお月さんも冴る

三條で鍛へたイヤサ秋の水

一、ほれてはづかし兄さの腕に

おろす小鎧のメヤサほどのよる

（一部当用漢字に変換してあります）

ここで言われている趣旨を要約すると次ぎのようになります。と思います。

「信秀は四谷正宗清麿の弟子で刀剣界では著名であり、明治大帝のお守り刀などを作り、切味で優れる名刀工である。

三条の鍛冶が刀の鍛冶で参考になるものがあるのではないか、岐阜県関市は刀工関の孫六の伝統を受け継いで刃物の町として著名だが、三条にも信秀がいることを、よく切れる刃物の産地としてもつと宣伝していきたい、そのための石碑建立が市民の協力を得て建立されたものである。」

この記事を読むまでもなく、私は玉鋼の鍛造、焼き入れに熟練した信秀が、明治の初め頃、鍛冶の町であつた三条で鍛冶屋さんと交流があつたはずだと考えていました。

信秀と地元の鍛冶屋さんについて

日本の刃物の原点は玉鋼です。但し、砂鉄を集めてたたら炉で沸かす製法はコストが嵩むため、明治の半ば頃、洋鉄が輸入されるようになると、以降はコストの安い洋鉄が主流となります。

当時は、まだ、玉鋼が全盛の時代でした。

信秀と地元の鍛冶屋さんとの間には、必ず関係があつたと考えていました。

私の本業が金物問屋なので、地元の業界に關係する書物を所蔵していますが、その中に次ぎのような資料がありました。

三條鋸工業振興會、昭和四十三年十二月十五日發刊の「三條鋸沿革」から引用します。

（一）玉鋼鋸の濫傷

昔の玉鋼はヤスリつきがよく、甘くちではあるが、切れ味は抜群で刃もちもよく、長切れする。今の鋸とは到底及びもつかない……

古老の鋸業者や大工さんから、よく聞かされてきた言葉である。鋸に限らず三条では、古くから数多くの利器工匠具、家庭刃物類が作られており、業界では誰でも玉鋼で鍛鍊した製品は優秀であると信じて来た。現在ではその鋸も殆ど使い果されて見る面影もなく、僅かに見る「玉鋼打」と裏首に刻みこんだ鋸は、昔の郷愁を誘わせるものがある。三条の鋸製造業者は、永い間の経験と熟練、ただ瞑想と勘に頼る以外にない非科学的な原始的方法のもとに、早朝から夜更けまで鋼と取り組み、孜孜として励ん

で来た生活の智慧が、藩政末期に到つて玉鋼の製法を編み出し三条鋸發展に一大転期をもたらした。心の緊張と肉体の努力の積み重ねである。と先覚者の偉大さに心打たれる。その玉鋼も明治中期の輪天鋼が容易に之れと替わるに及んで鋸（けら）と称する母体となるコークス状の鋼塊すら次第に影を没し、百二十余年経た今日では、製法の特技を語り伝えるなものも残念ながら見あたらなくなった。

阿部四兵衛門から独立した二代深沢伊之助（文化十四年一八一七年）はナマ鋸を作り、三代が始めて鋼の鋸を作つたと伝えられている。三代伊之助（文政三年生一八二一年〜明治二十二年

深 澤 伊 之 助

伊之助、初メ虎造ト稱ス、後父ノ通稱ヲ襲イデ伊之助ト改ム。文化十四年三條鍛冶町ニ於テ生ル。父名ハ伊造後ニ襲名シテ伊之助ト稱ス。

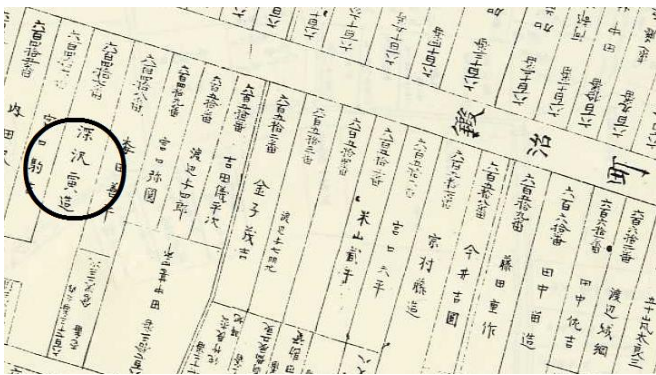
深澤家世々鋸鍛冶トシテ聲譽聞ユ、初代伊之助ソノ業詳ナラズ、鋸鍛冶ヲ以テ家業トセルハ、二代伊之助即チ彼ガ父伊造ヨリ創一ル、而シテ又、彼ガ鋸鍛冶ヲ創設スルヤ、師ヲ覓メズ全ク獨創的タリ。

伊之助（虎造）幼ヨリ父ヲ助ケテ家業ニ精勵専ラ其技ヲ磨ク、當時未ダ鋸製作ノ技甚ダ幼稚タリ、生金ノマ、製作スルヲ一般トセリ。伊之助密カニ謂ヘラク生金ニ代フルニ鋼鐵ヲ以テセバ、其効果必ズヤ大ナラント、其ノ製作ニ志セリ、偶々鋸鍛冶トシテ天下ニ聞ユタル小須戸村中屋卯太郎、會津中屋助左衛門ノ両家既ニ鋼鐵製ノ鋸ヲ製シテ販賣シ居レルヲ聽キテ益々其志ヲ堅ウシ、苦心慘憺獨力ニテ遂ニ成セリ。

歿一八八九年）が、玉鋼製の技術をどのようにして誰から習得したものかに付いては確証がない。当時既に農機具・庖丁・小刀（安政年間）の一部では玉鋼を使用しており、そこから技術を導入したとも考がえられ、また天保以来、繁くなつた船便を利用して会津、上州地方を行商した三条商人が、土産に持ち帰えつた鋸や話からヒントを得て苦心作製したのか、或いは「元來器用な性にて発明的技巧に富めり」と深澤家の口伝書にあるところから、他の教示を受けず専ら需要者の要望にこたえて研究自製に成功したものではないかとも考がえられ、全く想像の域を脱しない。

しかし、六代伊之助（明治二十四年生一八九一年〜昭和二十八年歿一九五三年）が、晩年譜つたといふ話によると、三代伊之助は越後に只一人の名刀匠栗原信秀と親交が厚かつたといふ。

当時、栗原刀匠は明治七年夏から同十二年秋までの五ヶ年間を、現在の日吉町に住み、三代伊之助は鍛冶町に居住しており距離にして僅かの距離ではないので、師事し大いに王鋼の鍛錬と焼入れ技術を研究習得したのではなからうかと推察される。栗原刀匠は明治十三年一月二十五日東京で急逝。そのとき三代伊之助満六十才、四代満三十六才であつた。（棒線筆者）「独立した二代深沢伊之助（文化十四年一八七七年）はナマ鋸を作り」とあるように、当時はナマ鉄和鉄で鋸を造つていたことになり、そして「三代が始めて鋼の鋸を作つたと伝えられている。」とあるように、玉鋼を使い、やがて焼き入れをするようになるのですが、その時に信秀から指導を受けたということです。なお、鋸は目を立てる時に必ず鑪で磨りますので焼き入れしても鑪が掛かる程度の硬さにしなくては出来ません。



先に発表した「地元三条での栗原信秀その二」で、参考資料として引用した地元の古文書「三条先覚事略」に深沢伊之助の項目があり次ぎのように記述されています。（「事略」）
この中に「伊之助（寅造）幼より父を助けて家業に精励専らその技を磨く・・・」とあり、三代目の本名が寅造と記述されており、明治初年三条町地図の鍛冶町に住まいがあります。（明治初年三条町地図鍛冶町）

深沢伊之助は、その後七代続いた鋸の名門で、歴代の兄弟、弟子が独立しており、三条の鋸鍛冶の系統では圧倒的に軒数が多く、何時の時代でも沢山の弟子筋の大きなピラミッドの頂点にいました。

但し、日本伝統の両刃鋸は昭和五十年代初め頃から普及し始めた替刃式鋸に市場を奪われ、木造建築の変化もあり、やがて三条だけで無く、全国の鋸職人がほとんど消滅してしまいました。

また、三条市史資料に次の記録があります。

一、小 刀

旧く、宝暦年代以前からの鍛冶町住民であつたといわれ、先祖以来の鍛冶、小右工門（梅田）が、出色の製品を市場に出し、梅心子園光小刀の作銘を高く謳われるに至つたのは安政以後で（金物同業組合調査）その子常次郎は青年時に、（明治七年後）晩年故山に帰来した刀匠栗原信秀に就き、焼入れの秘法を学んだといわれる。

尚その作銘「梅心子園光」は、当時の雅客松永造吉の附与したものとの伝承がある。（松永造吉遺話）

有名工としての伊之助、梅心子の名は、「国産金物発注史」上に見えてある。(三条市史料より)

なお、梅心子園光は現在も継承しておられ、小刀等の高級品を製作しておられます。

当時も三条は鍛冶の町でしたので、信秀から指導を受けた鍛冶屋さんが、他にも沢山いたはづで、要は、地元の産業にも貢献したものと考えています。

私が三十数年前に書いた当時のメモに「沢山の鍛冶屋さんから、信秀から指導を受けた話を聞いている」と書いてありました。

当時はまだ鍛冶屋さんが数百軒もありました。残念ですが、これを誰に聞いたか思い出せません。

そして、建碑除幕式を報じた商工新報の記念号には、鳥羽萬亀造が東京在住の信秀の遺族を訪問して調べた詳しい事跡が掲載されております。これは次号で記したいと思います。

信秀の遺族を取材した記録

石碑建立に当り、鳥羽萬亀造が東京の遺族を訪問して信秀について取材したことが商工新報一月号に二頁以上に渡って詳しく記述され

ています。石碑建立とは直接関係はありませんが、信秀についての遺族の言い伝えとして次に全文を掲載し、それに対する検証を致します。



帝都に名工の遺跡をたづねて

遺族に聴く信秀師の為人

帝都に名工の遺跡をたづねて
遺族に聴く信秀師の為人

俗説に傳らるる古人の事蹟 是には往々にして誤れるものあるを発見すると共に其の眞實の判定には充分精査の必要を感じしめられてある 刀匠として優に近世名人の一に算ふるに足る栗原信秀の事蹟に就ても俗説區々にして容易に眞を措き難いものを幾多耳にする深く探つて誤れるを正し 其の直なるを公にして郷黨相共に先賢の偉倂を偲ぶ 閑人の徒業と心無き人は笑はゞ嗤へ 郷土が産める幕末の名刀匠栗原信秀師の正しき事蹟の調査吾人は是を有意義の事業として着手し且つ成功を期す。

斯うした意見を持つ三条刀劍會會員諸士の信秀研究熱は門外漢の窺知し得られざる、底のも

のあり斷然積極的探查の事に従ふ事となつて私と先輩岡田氏とが主として其の方面に力を注ぐの役割を承はつたのであるが在来の巷説には信秀は酒豪であり且つ飄逸洒脱 徹底せる奇人であつたと為す向きと 豪放らいらく世事の總てに超然たる日常の生活振りを續けてはあつたが酒量は所謂一合上戸で酒に依つて自己を忘れ態度を亂す様な事は絶対に無かつたと評する人とがあり眞偽何れとも判別し得なかつたのである 殊に信秀終焉の地と其の年月とは只晩年三條を去つて行く處を知らずとのみで一切不明と稱せられてあつた遺憾……其れは眞に遺憾の極事 若し探つて得らるゝものならば力の限りを盡してと私と岡田氏とは百万苦心を重ねて晩年の消息を知る事に努めた蓋し三條刀劍會が最大の目的となす信秀師建碑句事業には是非其の一生の事蹟を知るの要ありとせられたからである 然うした會の熱意に對し偶然酬へらるゝ時が来た 即ち信秀師の遺族が今尚東京に現存しあり其の人々に就いて調査の歩を進めたならば必ずや得る處があろう……と 此の報を手にした私等は快然として起つた よしさら

ば上京 親しく探査の事に従がはうと即ち會よりの命託を受け事故上京の機を失せられた岡田氏に代わつて単独に私が上京したのは昨年の暮も押し詰まつた三十日 正月休みを利用したものゝ其れは慌たゞしい鹿島立ちではあつた

東京に現在の信秀師の遺族及び親戚としては本郷にある栗原初太郎氏と浅草にある今井長三郎氏 此二氏 一は故師の令孫にして一は愛甥 私の東京は是等の人々に就き出来得る限りの詳細を念願としてであつた

福島縣技師 厚意の通報に依り豫じめ(あらかじめ)私の上京使命を知る處あつた是等の人々は歳末から年頭へかけて内外多忙中の暇を強ひて割いて 良く私の上京をして徒事ならしめざらんことに最善をつくして呉れた事を私は心から感謝せずには居れない 遺族の人々の口づから親しく聴き得たる處や調査したる信秀師の為人に三條に於ける在來の説話とかなり異なるものがあつた

而して私は今其れを兎や角云わんとする者ではない 只今回の上京に依り知り得たる信秀師の一面に就き端的に述べて見度いと思ふの

である 無論傑出せる近世の名刀匠の面目を紙上に躍如たらしめるなどとは私の禿筆(とくひつ)を以てしては到底良く為し遂げ得ない業なる事を省みて自ら知るが為めである

眞の信秀傳 其れは他日適當の士によつて編纂せらるゝ事となつて居るが其の拔萃の程度で私は今私の信秀師談をかくまでである

只遺憾なのは撮影を託し置いた信秀師の墓碑の写真が未だ送り越して無い為めに本號に掲載し得られない事である

幼時父を失ひ 二弟一妹と共に再嫁の母に伴はれその生家栗林氏を離れて三條四ノ町の今井氏に養なわるゝ事となり 更に横町の釘鍛冶小左衛門方の徒弟となつた少年謙司 双葉にしてたかき梅檀の香り長く凡工の輔吹きとして甘んずるを潔しとせず 一日漂然主家を抜け出づると共に踪跡不明のひととなつたのである

謙司や何処に……雨につけ風につけ思ひ出しては不安の語らひを續くる骨肉縁者の溢るゝ恩愛をも餘處に

通ばれ名工に 然うした熱意の下にひたぶるの精進を續くる造刀技術會得の業 上方に

在つて知名の師匠についたのみ家人にさへも餘事を語らなかつた謙司信秀が刀劔師として最初削骨の苦業を積んだ處は風光明媚を以て鳴る都の空 帝在はす京師の地であつた

後年信秀との間に三女一男を擧げた彼の妻は實に京都知名の佛壇師の娘であつた

京都に於ける琢磨の修行に押しも押されぬ刀匠となつた信秀は住所を江戸に移して後更に幕末に於ける刀匠界の巨人として四谷正宗の雄名を恣にした山浦清磨 勤王の名刀匠として物情騒然たる幕末の造刀界に巨跡を印し雄名並ぶもの無かりし其の門下にあつて時には師命に依り其の代作を為し毫末の遜色をも作品の上に窺知せしめなかつた信秀入神の技は年と共に冴へを加へて名工信秀の名は當時の刀匠界を縦斷するの觀があつた

(附言) 一生を通じて極めて寡作家であつた清磨の作品と師命により代作をした信秀作清磨在銘の作品とは殆ど優劣を判じがたきものあり若し清磨在銘の代作品としても其れが信秀作である以上清磨同様の代償を以て何時にても取引る旨を天下に發表して居る有力なる愛刀家現存するに徴しても信秀

の作が如何に優秀であるかを窺知し得らるゝ

安政元年十一月 四十二歳の若盛りを一期として自刃した恩師清麿の不遇薄幸に心からなる哀惜の血涙を絞つた信秀は（當時三十九）同門の俊秀清人と共に極力亡師の工賃償還に努め 其の終るを俟つて獨立し悠々名工の眞價を發揮するに至つた 今 高野山の奥深く白雲たなびくあたり 時には閑古鳥のしば鳴きをさへ聞かんとする閑境に苔蒸して建つ墓碑一基 是ぞ多涙多感の名工信秀が地下に眠る恩師清麿の冥福を祈るの赤誠から獨力で建立した追慕の碑である

信秀が姓を栗原と稱し筑前守と任官し従五位ノ下朝臣として畏くも朝廷番刀匠の榮譽を擔ふに至つたのは獨立し間もなき孝明天皇の御宇と傳へられてある

あゝ 清麿師にして在世ならば 風し晨雨宵 一日として故師を憶はざる事なき信秀は恩師會心の作と稱せらるゝ一刀を二六時中身邊より放たず 是をしもせめて故師の代りにと赤心罩（こめて）護り通した 刀身二尺三寸餘稀代の逸品たるを首肯せしむる業物は今も

尚ほ信秀の遺族今井氏の秘藏する處となり鑑賞者をして垂涎三尺たらしめて居る

明治二年起工 同五年に竣工を告ぐるに至つた靖国神社（當時招魂社）の御神鏡三面は 御番刀匠としての信秀が畏くも有栖川宮殿下御下命の文字を裏面に拝彫し心血を注ぎ赤誠をこめて従事した彼れ一代の傑作品 當時東京全都の巷説は彼を當代無双の名工と稱揚し且つその神鏡火作りの圖は錦繪となつて賣出され其の解説文と共に所謂洛陽の紙價を高からしめたものであつたとか 私は其の古き錦繪入手の為に斯道の専門家を煩はすにかなりの長日時を附して豫約したのであつた

王政復古 世は明治維新と共に全日本国の各階級を通して名状す可からざるの變動改革の機を招來した

廢藩置縣次で廢刀令 特に此の廢刀令こそは全國幾百の知名刀匠を一朝にして失職の苦境に泣かしむる事となつた 轆轤落魄（かんからくはく） 東流西浪の漂泊人（さすらひびと）となつた中に栗原信秀其の人も算へられてあつた 御番刀匠として華やかなりし全盛を誇つた得意もあはれ槿花一朝の夢となり果てた

信秀は 明治五年 畏くも 明治大帝の御佩刀打上献上の大任を果すと共に家事を二女かね女の女婿謙造信親に託し後顧の憂ひを絶つと共に懐かしき故郷三條に 今は継父今井氏の家嗣と成つてゐる實弟新造を訪づれたのであつた

刀匠としては堂々たる貫祿の所有者たる信秀も 一個赤裸の人間謙司に帰つては名利に恬淡 俗衆の毀誉褒貶に些の関心をもちせざる飄逸洒脱（へうえつしやだつ）の奇行人 其の徹底せる超然生活振りには何人をも敬服せしめてあつた

（附記）信秀を酒豪となす統治法在来の一説は精査の結果其の次弟盛俊の誤傳なる事を確認し得た 盛俊は少年時江戸に出て酒舗の小僧となつたが中年にして主家を去り兄信秀の跡を遂ふて上京し彼も又刀工となつた 然して其の三條に帰り来りしは信秀よりは遙かに早く戊辰の役當時見附在にて官軍の為に捕へられ危くも斬られんとした 苦き経験の所有者である

酒豪の刀鍛冶として三條人間に兄よりも多数の馴染を有したのは實は此の盛俊であつた

幾十年振かに故郷三條の人となつた信秀が弟新造の厚意 即ち骨肉の温情に抱かれて新居を營なむだ處は現在の日吉町中程 三條第一の定舞台（今の劇場）所在地であつた 普ねく人口に膾炙する處の鎮守八幡宮の神鏡や伊夜日子神社の神鏡打上は 名工としての信秀が其の晩年を飾るに足る一偉業たるに云ふ迄もない

△ △ △

伊夜日子神社参詣の歸途遺失した眼鏡を買ひに東京まで……と 狐客漂然 近人縁者に改まつた離別の辭を述ぶるでもなく其のまゝ再び東路の旅に就いた信秀（遺族今井氏は明治十二年秋頃と云ふ）の姿は遂に三條の何處にも見出す人がなかつたのである

明治十三年の新玉 春早き東京も 遠がに未だ梅信を巷に聞かぬ正月の二十五日 前年上京後兎角に健康の優れざるを嘔ち續けて居た信秀は 其の朝遽かに重態に陥り家人知己交々の手當て心盡しの看護施療も其の効なく溘焉として長逝したのである 場所は本郷春木町なる女婿信親の寓居 行年六十六歳であつた

△ △ △

今年一月三日快晴の日の午後 東京市下谷池ノ端七軒町なる真宗の古利忠綱寺墓地の奥深く進み入る二人の墓參者 其れは信秀の遺族今井氏と 郷土が出せる幕末の名工栗原信秀師を心から敬慕する三條刀劍會の使兒たる私とである 墓地の奥梢々高地を思わする好適地に建つ一基の墓碑 此處ぞと教へらるゝ今井氏と並んで拝す碑の表面には

藏原筑前守信秀墓

向かつて右側には

信行院釋速成信士

明治十三年一月二十五日歿

同じく左側には

昭和六年十二月

孫栗原初太郎建之

と鑿痕鮮かに刻されてある あゝ 晩年三條をさつたその終焉の地を知らずと俗説に誤まり傳えられて在つた名工信秀師の英魂は長久に此の碑下に眠つて入るのです

今井氏と私と かたみがりには灑ぎ合ふ碑上への清水 赤心罩めて手向くる花一束 湧き出づる無量の感慨に胸深く閉ざされた私は何

時までもと墓前に立ちつくしたのであつた（松生）

信秀師墓前にて

幾そとせ絶ちたる知己を今に得て

師やほゝゑまんおくつきのもと

覆へす浮説のかぎを探り得てほゝみ立つ奥

津城の前

忠綱寺にて

かくて我が任果てたりと寛ろきの心しすかに苦茗をすゝる（商工新報より引用、漢字を一部当用漢字に変換しました）

当時の信秀にいての新しい情報

先に発表した「地元三条における信秀について」で説明したように、当時、地元発刊の「事略」に信秀のことが詳しく記録されていましたが、石碑建立に当り、福島要吉さんの紹介で信秀の遺族が東京にいることが解り、これは遺族を訪ねて取材した記録です。

この中には、当時、知られていた「事略」に記載されていない記述が沢山あります。

次にその部分を書きます。

「彼の妻は實に京都知名の佛壇師の娘であつた……」

「高野山の奥深く白雲たなびくあたり 時には閑古鳥のしば鳴きをさへ聞かんとする閑境に苔蒸して建つ墓碑一基 是ぞ多涙多感の名工信秀が地下に眠る恩師清麿の冥福を祈るの赤誠から獨力で建立した追慕の碑である」

「一日として故師を憶はざる事なき信秀は恩師會心の作と稱せらるゝ一刀を二六時中身邊より放たず 是をしもせめて故師の代りにと赤心罩（こめて護り通した 刀身二尺三寸餘稀代の逸品たるを首肯せしむる業物は今も尚ほ信秀の遺族今井氏の秘蔵する處となり鑑賞者をして垂涎三尺たらしめて居る」（棒線筆者）

注、但し、恩師會心の作の長さを二尺三寸餘としてゐるのは間違いで、先に發表した建立記念に福島氏が自費出版した「名工とその作品」に写真入りで次のように記されています。

一、無銘 清麿 二尺二寸五分
恩師遺作品として信秀の終生身邊を放たざりしもの 拵付

「當時東京全都の巷説は彼を當代無双の名工と稱揚し且つその神鏡火作りの圖は錦繪とな

つて賣出され其の解説文と共に所謂洛陽の紙價を高からしめたものであつたとか・・・」

「家事を二女かね女の女婿謙造信親に託し後顧の憂ひを絶つと共に懷かしき故郷三條に今は継父今井氏の家嗣と成っている實弟新造を訪づれたのであつた」

「附記」信秀を酒豪となす統治法在来の一説は精査の結果其の次弟盛俊の誤傳なる事を確認し得た 盛俊は少年時江戸に出て酒舗の小僧となつたが中年にして主家を去り兄信秀の跡を遂ふて上京し彼も又刀工となつた 然して其の三條に帰り来りしは信秀よりは遙かに早く戊辰の役當時見附在にて官軍の為に捕へられ危くも斬られんとした苦き経験の所有者である

酒豪の刀鍛冶として三條人間に兄よりも多数の馴染を有したのは實は此の盛俊であつた」

「幾十年振かに故郷三條の人となつた信秀が弟新造の厚意 即ち骨肉の温情に抱かれて新居を營なむだ處は現在の日吉町中程 三條第一の定舞台（今の劇場）所在地であつた」

「（お墓の場所）は本郷春木町なる女婿信親の寓居 行年六十六歳であつた」

これらは、この昭和十年の親族の取材で初めて發表されたことです。

間違つた言い伝え

この記事の中には、現在、既に通説になっているものが沢山ありますが、全て正しかったかというところでない現在の通説とは明らかに異なっている記述があります。

それを次に検証します。

「上方に在つて知名の師匠についたのみ家人にさへも餘事を語らなかつた謙司信秀が刀劔師として最初削骨の苦業を積んだ處は風光明媚を以て鳴る都の空 帝在はす京師の地であつた」（棒線筆者）

現在、清麿に弟子入りする前に京都で刀鍛冶の弟子であつたとは考えられていません。

京都に上がった時の年齢は書かれていませんが、三條市史資料他の鳥羽萬亀造の記述によると十三歳と記録されています。（但し、他に十五歳の記録もありますので正確ではないようです）

清麿に弟子入りした年齢について「研究」では三十四歳前後としていますので、この間、約二十年間について確実な伝承がないことになり

ます。

この点についても、家人にさへも餘事を語らなかつた謙司信秀と記述されているように、自分の過去に付いて話をしない人だったと考ええます。

「研究」には、京都では鏡師だったとの説がありますが、最初の作品に刀身彫をしていること、その後の巧みな彫を考慮すると、京都では彫金の仕事をしていたと思われます。

「彼の妻は實に京都知名の佛壇師の娘であつた」ということから考えると、私は仏壇金具の彫金をしていたのではないかと考えています。

余話、三条に今は亡くなれましたが、石田哲夫さんと言う彫金師がおられ、現役の時には毎年日刀保の新作刀展の彫金の部に鏝を出品しておられました。ご健在の折、良く遊びに寄せて頂きましたが、本業は仏壇金具の彫金師でした。

「(清麿が現役の時・・・)師命により代作をした」

「・・・清人と共に極力亡師の工債償還に努め・・・」

この二点について、信秀が清麿の代作をしたと

は現在考えられていませんし、没後の工債を償還したのは清人とされています。

「筑前守と任官し従五位ノ下朝臣として畏くも朝廷番刀匠の榮譽を擔ふに至つたのは獨立し間もなき孝明天皇の御宇と傳へられてある・・・」

これに付いても時代の感違ひがあるようです。

孝明天皇が在位なさつたのが弘化三年二月十三日から慶応二年十二月二十五日(ウキペディアから)ですが、信秀の最初の作品とされている刀の裏銘が、在位なさる前の嘉永五年で時代が合いません。

その後、筑前守を受領したのが慶応元年で、孝明天皇御在位の時でしたので、この時と勘違いしていると思います。

なお、慶応元年の受領時の記録があります。

(筑前守受領書、昭和十年記念紙より)

平信秀

從位行權中納言藤原朝臣定功

宣奉 教件人宜令任

筑前守者

慶應元年正月大詔勅教件人

また、この時に「・・・従五位ノ下朝臣として畏くも朝廷番刀匠の榮譽を擔ふ・・・」と書いてありますが、これも、實際は明治になつてからのことです。「事略」に次ぎのように記してあります。

「(明治政府が建立した)靖國神社ノ神鏡ヲ奉鍛スル時ノ如キハ、故有栖川宮殿下ヨリ下繪ヲ賜リ、期間中從五位ニ叙セラレ、・・・」(棒線筆者)

実は、他にも、私がどうしても腑に落ちない記



述がありました。

「・・・横町の釘鍛冶小左衛門方の徒弟となつた少年謙司・・・」についてです。

最初は極漠然と、京都での約二十年間について遺族に何も語らなかつた信秀が、何故、もつと前の子供の時のこと、それも親方の名前まで家族に話をしたのか、それが不思議だと感じていました。

私が三条金物卸商組合で地元の金物の歴史を纏めた本の編集に係わつた関係で、地元の金物の歴史について勉強をしたことがあり、そこで得た知識と合わせると段々と不信が募つたのです。

明治以前の三条町と近在の村にはあらゆる点で大きな格差がありました。当時の三条の子供が、それだけ格差のあつた一ノ木戸の鍛冶屋に弟子入りするだろうかとか大きな疑問を持つようになりました。

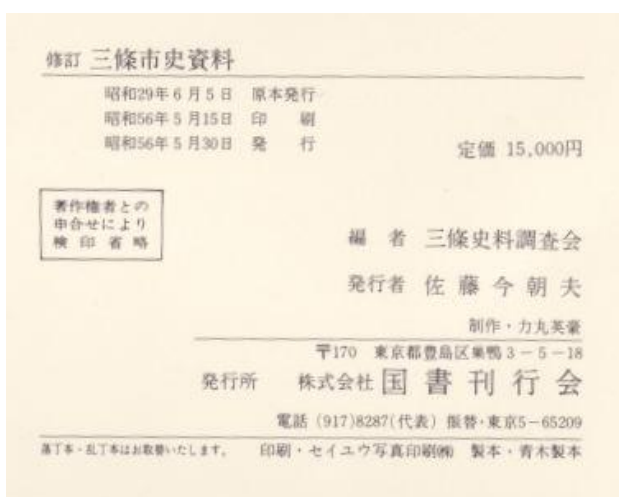
次に、それを検証してみたいと思います。

当時の三条町と一ノ木戸村について

横町は当時一ノ木戸村一部で、一ノ木戸村が、三条町に編入されるのは明治三十四年のことです。

三条町と一ノ木戸村の争いに対して、享和三年以降に幾つかの裁許書がありますが、ここでは享和十年の裁許書を紹介します。

裁許書の原本は墨書きの絵図だそうですが、これを現代文に翻したもの全文は長くなりしますので、一部を次に掲載します。(三條市資料奥付)



「(略)今回の事件には先例になることではないことに一之木戸村が耕作地が少くなつたという理由で商店街を開くことの許可を申請して

いながら他村の者を入居させていること等すべて一之木戸村の行為は不当である。就ては今後一之木戸村の市街と商工業は一切禁止する。今まで建築した住宅はそのまゝ許可して置くが店舗は撤去し表通に面した側は閉鎖し農家の通常住宅とすべきは勿論、この後の建築はすべて従前通り農民住宅に造らなければならぬ。なお商店街を開く際に新に附け替えた道路は、その前の歌態に復元しなければならない。田嶋村から今までの道路へ上る入口の處へ、本年の春建てた農家は改築し、規定通り土堤通りは交通路とすべきであり、同地点より一之木戸地籍内限りの新這及び用水堀の柵はいずれも取り除き、沿道は以前の如く田地にしなければならぬ。一之木戸村から三條に入る道は従前通り道幅を貳間に定め、村内より土堤の大道へ出る道幅は従前通りと定める。以上の通り決定した。なお土堤通りの沿道に住居している一之木戸村民四人の住宅にとりつけて堤敷へ掛け造りにした店及びその他農民の営む露店営業は従前からのものであるという由を申立てゝいるけれども、その証拠は無いから今後禁止する。たゞし諸處のいち場へ特出して販売す

ることは自由である。田嶋村の沿道に十九軒の
小店舗の零縮小売業及び手工業がある。この業
者は今まで通りの営業のほか重要な商業を営
んではならない。以後戸数も増加してはならな
い。以上田嶋一之木戸両村は理事者連名捺印の
文書を提出して承認したのであるからその通
り履行せよ。就ては後日の証とするため、図面
の裏にこの判決を記入させて係官一同捺印し
当事者双方へ下附して置くからこれを保管し
て置くべきものである。(翻文小杉) (三條市
資料巻末より) (漢字を一部当用漢字に変換し
ました)

この裁定で、一ノ木戸村は商店街を作つては
ならないと言ひ渡しており、買ひ物は三條町で
しなさいと言うことです。尚、田嶋は三條より
一ノ木戸を挟んだ遠方の村です。

私の住まいの旧四ノ町(現本町六丁目)は旧
三條町では一ノ木戸と反対側の一歩遠方にな
りますが、横町までは歩いて二十分〜二十五分
で行ける程度です。

当時も今も三條の町は全て家並みに埋め尽
くされた面積の小さな町であり、特に当時は商
店街の他に、足袋工場、太物商(今井新造の商

売)、染物屋、金物卸、刃物鍛冶等に特化した
商工業の町であり、一ノ木戸村とは大きな差が
あったのです。

更に、三條と一ノ木戸の鍛冶の違いについて、
同じ三條市資料の産業編に鳥羽萬亀造が執筆
した記録があります。(三條編のトップ)

産業篇

第一部

鳥羽萬亀

三條金物三百年の足跡

「(略)一ノ木戸や裏館の鍛冶は小ッぱつめ
(小器用)だが、刃物鍛冶に一番大切な、鋼鍛
えという難業に十年の牌(アカギレ)を切らし
ていないからナマモノ(鈍器)ぱつがり造りた
がる、日本鋼(玉鋼)が鍛えなくては鍛冶の看
板が泣くぞ」

多く刃物鍛冶から発達して来た大字三條の
鍛冶は、それ程に鋼鍛えを重く視、且つ技の寿
ぎに骨身を削つたもので、その験しは明治の中
期過ぎまで技術に立証されてあつたといわれ
ている。

敢えていう・・・三條の金物発達の事蹟をた
ずねるには、昔の三條町が、現今の三條市とち
がつて、享保二年(一七一七年)の半ばから明

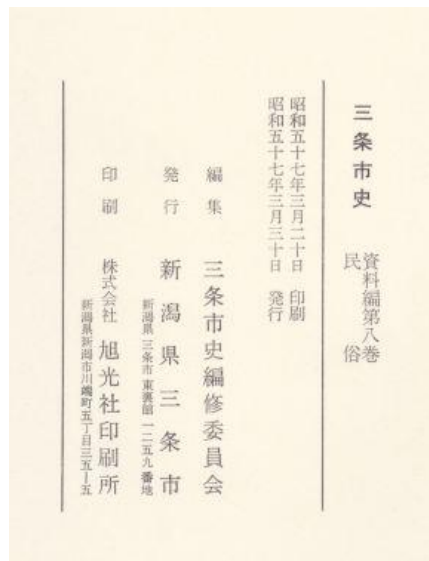
治維新のこと成るまでの間、田島、一ノ木戸の
両村とは、領主を異にし、経済上の利害また必
ずしも一致していなかったことを先ず知らね
ばならぬ。即ち享保三年以来、町、村間に、時々
論争のことあつたが、法の裁きの前には村は常
に町に圧され気味であつた。人情の常、それを
快しとはしなかったが、平穩の生活を希う田島、
一ノ木戸村農民多数の脳裡には、徒な紛争を愚
と考える一面、半ば運命と為すあきらめがあつ
た。考慮の結果は、小器用人ならば年季入れの
苦勞を要せず、家庭従業の見習いに依つて、婦
女子でも、容易に造り得る釘鍛冶に活路を見出
した。

但しその製品は、田島、一ノ木戸及び裏館に
金物商人の許されて無かつた時代とて、これを
全部、三條商人の売捌きにゆだねられることゝ
なつた。」(棒線筆者)

このように、当時の三條の鍛冶は刃物を造り、
一ノ木戸の鍛冶は、所謂焼入れしなないナマ物の
金物類を造つていたこと、更に、それらの完成
品は全て三條商人が販売したとされています。
また、一ノ木戸村の鍛冶屋には誰でも簡単に入
れて、鍛冶仕事も簡単だった事、但し、現場は

厳しく、その現場の様子を記録した資料がありますので次に紹介します。この記録は明治の頃のものですが、一ノ木戸鍛冶には、このような伝統があったことを示しています。

三条市史資料編第八巻 第二章 町の生業第四節 鍛冶より引用しました。(次が三条市史資料編第八巻の奥付です)



「 6 鍛冶と横町

横町は以前は鍛冶冶の集中していた所であった。その鍛が貸鍛屋に売られていたのである。そして貸鍛屋から鍛の直し仕事をもらっていた。すでに知られているように藩政時代には三条は、三条町方と一ノ木戸村に分かれており、支配も異なっていた。そして鍛冶町も信濃川と

五十嵐川の合流点に近い三条町方と一ノ木戸村の鍛冶町に分かれていたものが幕末になんらかの理由によって町方に吸収されていたものと言われている。

ところが町方の鍛冶町（現本町六丁目あたり）が今でも刃物鍛冶が中心であるのに対して、横町はかなり性格を異にしており、どうも旧一ノ木戸村の鍛冶の流れを受け継いでいるように見受られる。もちろんこれは確かなことではないが、しかしこの横町の通りの鍛冶屋達は冬場に鍛を作り、夏の手のあいた時期にはビョウウ釘、火バシ、鉋、クギスキ等を作っていたとの話で、鎌や庖丁のような鋭利な刃物にはまったく手を出していなかった。

一般に野鍛冶にあつては鍛と共に鉋も作る例は多く、これに対して薄刃物は別であつたから、ここでも元は鍛、又鍛、鉋などの農具が釘と共に主であつたと思われ、他の製品は後に加わつたものと考えられる。

それでは聞取りをもとにしてこの鍛冶屋の生活をのぞいてみたいと思う。既になんとか記してきたが鍛作りは冬の仕事であつた。時期は大体十二月から四月までで、鍛冶屋は朝五時

ころから仕事に入り、夜も遅くまで働いたということである。昼間は新しい鍛を作り、夜になると主に古鍛の直しをしたとのことではなかなか多忙であつた。

一軒の鍛冶屋で住込み二人に、通いが三〜四人程度働き、冬場に限って近在の農家の人が泊り込みで稼ぎに来るといふ例も多かったとのことである。また、流れ職人が手ぬぐい一本持つてやって来ることもあり、手不足の時は雇い入れたけれども、不必要な時には小遣いをくれて飯を食わせて

帰したとのことで、こうした事は大正の初期までであつたという話である、

鍛冶場には普通はどこでも火床が二つあつて、ワカシと火作りに分けられていて、七、八名の職人で一日三〇枚位の平鍛作つたとのことである。

向い槌（先手）は三人が普通で一番未熟なものをまん中に挟んで打つた。この時に職人達は鍛冶屋ギモンというものを着ており、それは浴衣を分厚くしたようなものであつたが、焼けこげがあちこちに付くのでツギあてだらけだったと言う。仕事が大変にいそがしく鼻をかむ時間

もなく、そのことを次のように表現したとも言う。

「横町とおればまんなか通れ 雁木柱につまみばな」

だから小便に行くのも惜しみ、鍛冶場の一角に便所がしつらえてあった。

それでは職人達はどうにして一人前になっていったのであろうか。昭和の初めは次のような様子であったと言う。大体は小学校を終えると一三〜四歳で奉公に入り兵隊検査の時間が年期明けとなるが、それは二〇歳である。はじめは松炭を割って細かくして、それを通してかける仕事や、鉄を接合する時に用いる硼酸（ホウサン）や鉄粉をヤゲンでこなす仕事からはじまった。手のあいている時には鍛冶場の角にしつらえた玉切りの木台に向って向い槌を打つ稽古をやらされた。こうして三、四年たつとようやく三人ないし四人で打つ先手に加えられるそのまんなかを受け持つようになり、この段階から小遣いがもらえるのである。休みは一日、十五日でこの時に小遣いをもらったのであるが、里心がおきても盆暮以外には帰ることはゆるされなかったという。

鍛冶屋の小僧はどこでも休む暇なく働いたが、向い槌を打つかたわら製品の仕上げも受け持っていて、鍛えならば刃先きのヤスリがけ、磨きなどをやらされたわけである、こうして年期が明けるころにはようやく一人前の職人となつていった。年期明けには親方はフイゴ、金床、ハシ、ツチを弟子に送り、弟子は翌一年間礼奉公をした。

職人は年期が明けると一人前ということになり横座にすわれるようになるが、だからと言つてすぐに独立できるわけではなく、その後も数年間は職人として過ごし、二六〜七歳になつて独立をした。刃物鍛冶ではこの独立はなかなか困難であったようで他所での聞取りでは小僧から入つて親方になることの出来るのは五人に一人位で、ずっと職人を通すか転業していく者も多かったという。」「(三条市史資料編第八巻より) (棒線筆者)

一ノ木戸の鍛冶は忙しい仕事だったが、なり手が沢山いたことが解ります。

三条町と一ノ木戸村では、商業も、金物問屋も、鍛冶屋も、これだけ大きな違いがありました。

当時の三条町の住民が自分の子供を、このよ

うに周りの農家の子弟でなり手が多く、厳しい仕事の隣り村の鍛冶屋に弟子に出したとは考えられません。

信秀の母は三条のかつての名門池氏の出身であることを義父の今井新造は、当然、知っているはずだ。その長男を隣村の誰でもなれるようなナマ物鍛冶の弟子に出したものでしょうか。

「幼時父を失ひ 二弟一妹と共に再嫁の母に伴はれその生家栗林氏を離れて三條四ノ町の今井氏に養なわるゝ事となり 更に横町の釘鍛冶小左衛門方の徒弟となつた少年謙司」(棒線筆者)

私は長年、この部分を読む度に、京都の約二十年間について家族に何も話さなかった信秀が、何で、更に昔の子供時代の勤め先と親方の名前まで伝えていたのだろう、この記述を不審だとする思いが段々と強くなっていました。

明治七年に信秀は三条に帰つて来ます。

もし、これが事実だったとしたら、帰省後に昔の親方か、その子孫、あるいは当時一緒に仕事をした弟子達が黙っているはずがありません。全国に名を成して帰つてきた信秀を称える出

会いが必ず、あつたはずですが、地元の伝承を記録した「事略」には何も書かれていません。

これは事実ではないからだと考えています。

私は以上のことから「横町の釘鍛冶小左衛門方の徒弟」になつたとしている記述は、遺族か取材者の創作であると考えています。

引用文献は文中に記載しました。

（とやまのぼる 新潟県）